

山手から見た幕末の横浜居留地 元治元年(1864)頃

開港 の ひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

●編集・発行／横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3 丁231
電話 (045)201-2100
●発行日／昭和62年2月2日
●印刷／(有)三信印刷所

収蔵資料の紹介

F・ベアトの幕末日本写真帳

横浜開港資料館では二月一日より「写真家ベアトと幕末の日本」展を開催します。ベアトと当館が所蔵するそのアルバムについて紹介していきましょう。

F・ベアトについて

フェリックス・ベアト(Felix Beato)は、イタリア生まれのイギリス人で、クリミア戦争やインドのセポイの乱、中国の第二次アヘン戦争等を取材し、来日以前すでに報道写真家として著名であった。日本に定住することになる一絵入りロンドン・ニュース」の特派画家兼通信員、ワグマンと中国で知りあつたことが、来日のきっかけとなつたようである。

文久三年(一八六三)横浜居留地二四番で、ワグマンと組んでスタジオを開き、居留民や外交官、軍人らの肖像写真の撮影に応じた。また日本人の風俗・習慣を示す演出写真も手がけた。これらをアルバムにまとめ、英軍兵站将校マレーの執筆になる解説シートを添えて本格的に売り出すのが、明治元年(一八六八)頃のことである。元治元年(一八六四)の英米仏蘭四国連合艦隊の下関砲撃や、明治四年(一八七二)のアメリカの朝鮮遠征隊に従軍するなど、報道写真

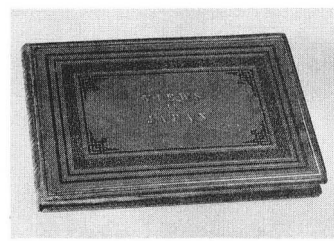
家としても行動したが、日本におけるベアトは、どちらかというと芸術味豊かな風景写真に新境地を開いたように思われる。

ベアトの滞日期間は二〇年程に及ぶが、明治一〇年(一八七七)には写真館をスタイルフリードに譲り渡し、貿易や不動産業、洋銀相場といった商売に関心を移してしまふので、写真家として活動したのは一五年間程のことである。とくに精力的だったのは幕末の最後の数年間であり、明治維新以後、日本が急速に変貌を遂げる直前の風景や人々の生活を記録にとどめ、世界に紹介した。

当館所蔵のベアトの

アルバムについて

当館所蔵のアルバムのうち、ベアト自身が売り出したものは三冊ある。一つは昭和三年、イギリス人貿易商バロウズ氏から横浜市に寄贈されたもので、九七枚の風景写真が含まれており、解説シートが添えられている。他に一〇〇枚組と五〇枚組の二冊がある。ま



ベアトの売り出したアルバム
——“VIEWS IN JAPAN”
100枚の風景写真が収録されている。

た、個人アルバムに貼り込まれたものや、装丁がくずれたもの、ベアトからネガを譲り受けたスタイルフリードやそれをさらに継承したファサリ商会のアルバムに含まれるものなど、重複を除くと二三点の風景・風俗写真がある。スタイルフリードやファサリ商会、そこで修業を積みぬちに独立した日本人写真家達や、下岡蓮杖とその弟子達の手で、明治一〇年代頃から横浜写真の全盛期が現出する。それは風景・風俗ともに日本趣味の濃厚な写真と、水彩絵具による着色、そして時絵や螺鈿細工を施した木製表紙のアルバムによって特徴付けられる。装丁を別とすれば、その特徴はすでにベアトの作品に現れており、しかも後年の平面的で不自然な写真と比べると、はるかに自然であり、立体感がある。横浜が日本を世界に紹介する窓口としての役割を果たすにあたって、ベアトの存在を得たことの意味は大きい (斎藤)

小沢健志先生に聞く

——『写真家ベアトと幕末の日本』展に寄せて

日本写真史の權威で、九州産業大学(大学院芸術研究科写真史研究室)教授の小沢健志先生をお迎えして、幕末の写真家F・ベアトにちなんだお話を伺いました。なお、横浜市美術館開設準備室員で写真史に詳しい木村康夫氏にも同席をお願いしました。

齋藤多喜夫(館員) 横浜開港資料館では二月一日から「写真家ベアトと幕末の日本」展を開催します。当館では、歴史資料としていわゆる「横浜写真」と呼ばれる古写真の収集を図ってきていますが、そのなかに幕末の写真家F・ベアト(F. Beato)の撮影と断定できる写真が約二四〇点含まれています。ベアトが日本で撮影した写真の全容は充分につかめていませんが、おそらくその六〇〜七〇パーセントを当館が所蔵していると思います。今回の企画展示では会場の制約もあつて全てを紹介することはできませんので、展示にあわせて、当館所蔵のベアト全作品を収録するカタログ『F・ベアト幕末日本写真集』を刊行します。

ところで、最近とくに各方面で古写真の発掘がなされています。個人秘蔵の写真、あるいは海外に眠っていた幕末日本の写真が数多く発掘され、展示が行われたり、写真集が出版されたりもしています。

最近、ブームといつてよいほど、幕末明治の古写真の発掘が進められています。まず現在では古写真の損傷が甚しく、消滅の心配もあるところから、古写真の保存収集を図りたいという前提があります。さてブームの背景のひとつには、



小沢健志氏

古写真ブームの背景

小沢健志(九州産業大学教授)

す。こういったいわば古写真ブームの状況があるわけですが、最初に、小沢先生からブームの底流にある古写真のもつ意味といったようなことをお聞かせいただければと思います。

写真には、写真のもつ記録性から歴史の証言者という一面がありま すね。当時の写真家たちが、人物、風景、風物、風俗等をいろいろな視点から撮影し、古写真が目で見える歴史として残されていることですね。もうひとつは、現代の写真表現の原点がそこにあるのではないかとことです。古写真には、写真が事物を写すこと自体に驚きを示したような表現も残されていますが、初期の写真家がいかに表現したかということにも現代では関心がたかまっています。記録性と表現性という両輪があいまって現在の古写真ブームとなっているかと思えます。

齋藤 歴史をやっている者としては、通常は文字資料によつて出来事を追うわけですが、そこに写真が結びつくという点ではわからない迫真性がでてる。また、古写真は、植物学者や文化史、建築史といったいろいろな分野の人たちが資料として活用することができます。と同時に、とくにベアトの写真をみてみますと、ひとつの画面として構成された芸術性が感じられます。横浜市美術館の開設準備にあたられていた木村さんから、美術史のうえからみた古写真の価値について一言お願いします。

木村康夫(横浜市美術館開設準備室) 写真のもつ情報量は多いわけですから、見方によっては、自然科学的立場からの興味、歴史からの興味、あるいはその時代の雰囲気を読みとりたいという鑑賞の立場からとさまざまな要素がある。同時に、人間が撮った作品であるという点で、回顧以上の美学を感じられる作品もある。古写真ブームは主に幕末明治の写真ということなのでしょうが、世界的にも日本の幕末明治期の写真に対する関心はたかまりつつあります。いままであまり紹介されなかったことでもあります。やはり未知なるものを知りたいという欲求と、写真は生まれてから一五〇年くらいになりましたけれど、そのルーツを探りたいということがあるのだと思います。芸術としての写真といった場合は、どこからが芸術なのかということとは非常に難しいわけですが、古写真のもつ芸術性の体系化は今後の課題になるかと思えます。



木村康夫氏

小沢 それはベアトの写真にも感じますね。

木村 ベアトの東海道を撮った風景写真がありますが、それなどには、構図上に浮世絵との関連を感じます。

齋藤 文久二(一八六二)年の英字新聞に、ベアトの前に日本に居たソンドラスという写真家についての論評記事があつて、それを読んでみますと、当時の写真に対する評価が語られています。「この

美しい国と人々について、これまで企てられたどのような書物よりも正確な観念もたらされるであろう」とあって、当時の写真には日本を海外で紹介するという重要な役割のあったことがわかります。日本の紹介といっても、風景風物風俗を紹介するだけでなく、木村さんがおっしゃったような日本の視角、表現方法を含めた紹介もあったのではないかと。浮世絵については従来からよくいわれていますが、写真でもそういったことができるのではないかと。写真におけるジャポニスムという観点も世界的写真ブームの底流にあるかもしれませんね。

写真家ベアト

齋藤 さて、本題のベアトにはい



齋藤多喜夫館員

りますが、最近ベアト二人説がでて話題になっていますね。

*朝日新聞夕刊 昭和六一年五月二十九日

小沢 欧米でも一人説をとっている写真史家もまだいますが、従前の日本では、伊奈信男氏が一人説

といつてもその当時は一人も二人もなかったわけで、やがて欧米から二人説が入ってきました。日本では、例のスフィンクス前で遺欧使節一行を撮った写真に、「A・ベアト」の署名があつて、A・ベアトとF・ベアトは同一人物か、兄弟か、双子かともいわれま

木村 作品的にみていかがですか。小沢 違いますね、明らかに。そうなるといよいよ二人のベアトになりましようかね。

木村 ベアトは、もとは「アントニオ・フェリックス・ベアト」として一人として扱われてきました。最近発刊の、今日ここにおも

木村 F・ベアトの場合、戦争の写真がありまして、フェントン(Fenton, Roger)とロバートソン(Robertson, James)に次ぐ存在、フォト・ジャーナリストとしての評価が一般的だと思います。

小沢 たしかに写真家としてのF・ベアトに限って言えば、クリミア戦争(一八五三〜五六)従軍から

小沢 戦争(一八五三〜五六)従軍から始まって、世界の各地に事件を追って活躍し、最後に極東の日本にまで足をのばし、ちょうど近代日

本に載っているというところで、一九〇六年をとっている文献もあります。A・ベアトの方も、一九〇六年にルクソールで没しているの

本に載っているというところで、一九〇六年にとっている文献もあります。A・ベアトの方も、一九〇六年にルクソールで没しているの

齋藤 横浜におけるベアトの動静は、当時の英字新聞によって今ほぼ明らかにしたと思つていま

齋藤 横濱の写実家ということになると、記録に遺されている範囲ですが、ベアトの前に、ソンダース(Saunders, William)とパー

カー(Parker, Charles)という写真家がいいます。ソンダースの写真のひとつに、絵入りロンドン・ニュースに絵になつて



W. ソンダース撮影による横浜居留地 (『絵入りロンドン・ニュース』 1863年9月12日号)

薩英戦争や外国公使団の大阪・兵庫遠征に従軍した形跡があつて報道写真家として活躍したようすつまり、ベアト以前に、ソンダースという芸術写真家、パーカー

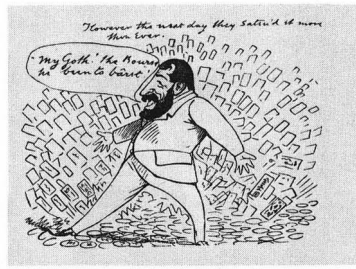
小沢 従軍時の記録写真は、報道写真家としてのベアトをよく伝えていると思つていますね。

齋藤 ベアトは二〇年ほど横浜にいて、日本での滞在が長いわけですが、写真家としては幕末期まで

木村 ベアトは、一八七七(明治一〇)年に原板をステイルフリード(Stieglitz)に譲り渡している

ありますが、風景写真とはいえないなり芸術的な写真を撮っているようです。パーカーの写真は現在伝わっているものがないのですが、

みてよいのでしょうかね。
齋藤 ちょうど西南戦争のときで
すね。直後に洋銀相場に手を出し
ています。



洋銀相場に活躍するペアト
(['ジャパン・パンチ』1880年11月)

木村 他にはどんなことをやって
いますか。

齋藤 不動産業などあらゆること
をやって、相当利益をあげたよう
です。

小沢 写真家の性格としてさまざま
ありますね。対象の変動には興味を
もちますが、安定すると興味を失
う。下岡蓮杖がそうですね。上野
彦馬とは対照的で、彦馬は最後ま
で人間に興味を持ち続けて人物写
真を撮っている。どうもふたとお
りのタイプがあるようです。ペア
トにとって写真以上に興味のある
ものができたということでしょう
か。

齋藤 明治の初めになると、優秀
な日本人の写真家が多くでてきた
ということもあつたのでしょうかね。

ペアトの写真の特色

齋藤 今回の展示を企画するにあ
たつて、ひととおり『横浜写真』
に目を通しましたが、そのなかで
もペアトの写真ははつきりした特
徴をもっていることがわかりまし
た。それは、風景写真ですが、近
景、中景、遠景を構図に入れて、
絵画的な画面構成をとっています。
とくに、ペアトの場合は、遠景を
中心に据えて、近景を額縁的に配
して奥行のある写真にしています。
撮られる側の風景そのものの問題
もあつて、日本の風景が視点を誘
い出すといえますか、日本の風景
に向かいあうときに自ら画面構成
が作りだされてしまうことがあ
つたかもしれません。ペアトの風
俗写真にもそのことがいえて、こ
の場合ペアトは影をうまくつかっ
ています。

小沢 ペアトは日本画や浮世絵は
もちろんみていたと思いますし、
有形無形にそれらの影響を受けて
いたと考えてよいのでしょうか。

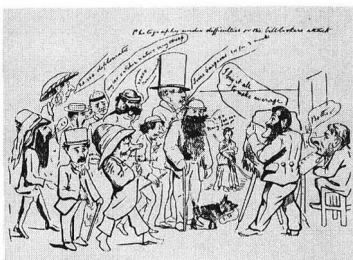
齋藤 先達で、セオドア・ウオー
レス展を見ましたが、ウオーレス
の絵にもペアトの写真に似た視角
が感じとれ興味深かったのですが、
西洋のジャポニスムに写真の影響
があるのではないかと。近年、世界
的にジャポニスムの評価がたかま
つてきているわけですが、そのな
かでペアトの写真も再評価されて

くるのではないかとという気もしま
す。

小沢 当時の写真はレンズの表現
力、たとえば焦点のなが目のレン
ズを使うことで写真表現が特色を
もつてくるということもあります。
齋藤 焦点がなが目ということは
小沢 遠近感、距離感に表現的特
色がみられるということですね。

木村 当然、カメラとレンズの性
格が作品に反映されてくる。
小沢 ペアトが使ったカメラやレ
ンズはどのようなものだったのだ
でしょうか。

齋藤 カメラは遺っていません。
ワグマンのパンチ絵に描かれて
いるものくらいでしょうか。



カメラをかまえるペアト。右端はワグ
マン(['ジャパン・パンチ』1866年6月)

木村 この絵だけではよくわかり
ませんが、四ツ切程度のものでし
ょうか。

齋藤 それを密着で焼く。

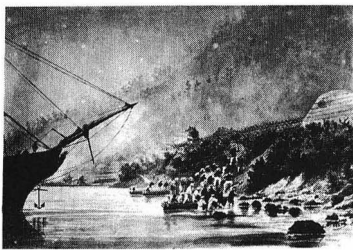
木村 ですからとてもシャープに
なるわけです。とくにペアトの写
真は、他のものにくらべて保存状

態が極めて良く、美しいものが多
いですね。

齋藤 とこで、ペアトに限らず、
写真というものが一方で魔法と恐
れられていたわりには、容易にう
けいれられてきた面があります。
その秘密はどのあたりにありまし
ょうか。

小沢 ひとつには、写真が蘭学、
つまり西洋諸科学の一項目として
入ってきたこと。いまひとつは、
始まったばかりの洋画が写実的、
客観的な描写を第一義としていた
ことが写真のもつ実用的表現を受
けいれ易くしたということになり
ましょうか。

木村 たしかに洋画が入ってきた
ときには、遠近法とともにその写
実性に惹かれています。この意味
から、ペアトがワグマンと組ん
で仕事をしたということは非常に
重要です。



ワグマンの絵をペアトが撮影したもの

小沢 絵画における記録性の分野
の役割を、新しく入ってきた写真

が肩代りしたとみることができま
すね。

木村 互いに補完的な関係にあつ
たでしょう。当時のカメラはシ
ャッター・スピードが遅いですが
ら、実況向きではありません。そ
こをワグマンのスケッチが補っ
ている。

齋藤 ペアトは下関戦争に従軍し
ているわけですが、流石に実践の
写真撮ることができず、ワグ
マンの絵を写真に撮るといこと
をしていますね。いずれにしても、
科学的関心から写真に入る、ある
いは写実的関心からとふたとおり
あるようですね。

木村 それはヨーロッパでも同じ
だったと思います。

ペアトと蓮杖

齋藤 ペアトと同時期に活躍した
日本人写真家として下岡蓮杖がい
ます。蓮杖も日本の写真のパイオ
ニアであるわけですが、ペアトと
くらべて技術的にうまいとはいえ
ません。にもかかわらず、ペアト
の存在がありながら職業として成
立したのは何故かという問題が
あります。

小沢 ペアトが既に完成した写真
家として横浜に登場してくるのに
対し、蓮杖は始めて横浜で写真を
習得したという前提の違いがあり
ます。横浜における蓮杖とペアト

の関係ですが、直接的な師弟関係はなく、蓮杖はアメリカ人のウンシンなる人物から写真技術を習得したと伝えられています。このウンシンとは誰か。いろいろ調べてみました。アメリカ側にはウンシンなる写真家はみあたりませんが、今回の展示カタログの解説編で、齋藤さんがウンシン＝ソングダース説を新しうしておられて大変興味深いのですが。

齋藤 ウンシンはアメリカ人となつていますが、蓮杖自身がイギリス人としている記録もあります。ちょうど蓮杖の修業時代とソングダースの滞日時期が重なります。ソングダースは上海で「森泰象館」という写真館を開いていて、ウイリアム・ソングダースのファースト・ネームの略記である「W.H.」と、森泰象館の「森」とでウンシンとなります。

小沢 いままで実体のない人だったが、ウンシンをソングダースと仮定するといろいろ歴史的な辻褄があつてくるね。

齋藤 確証はないのですが、矛盾もないといつたところでしょうか。小沢 さて、ベアトと蓮杖ですが、ベアトの場合、表現者として風景、風俗等を対象とし、自然さを尊重しているという特色があります。蓮杖は明らかに商業用としての撮影で、自然さという点では演出的な面がつよいところがありますね。木村 ベアトの方が写真家として

の経歴が長く、しかも報道写真家として出発しているのです。その差が当然でてるのでしょう。

齋藤 ベアトも蓮杖も対象としては似たようなものを撮っているが、ベアトのものをみると、同じ売られた写真ではあるが、日本を記録しておくという意識が基本にあつて、それが自然さというかたちになつてあらわれている。

小沢 そうでしようね。ベアトは外国人としての興味をもってカメラを向けたと思ひますし、蓮杖は外国人が喜ぶような写真を撮つたということ、その違いがありますね。

齋藤 スティルフリードになると、演出過剰が目につきます。風俗写真の流れからいうと、むしろベアトの方が孤立している。

小沢 いずれにしても、蓮杖とベアトの差は、蓮杖が外国人に売るために撮っているという前提にあるかと思ひます。この点で、いわゆる「横浜写真」が日本の写真史で特異な場をもつことになるのだと思ひます。

〈横浜写真〉の流れ

齋藤 いまベアトと蓮杖の比較から「横浜写真」ということができましたので、日本の写真史における「横浜写真」の位置付けを最後に

お聞かせいただければと思ひます。

小沢 横浜、長崎、函館といった開港場から入つた日本の写真は、それぞれ特色ある写真の流れをつくつています。長崎は、上野彦馬を頂点として人物写真を軸に発展し、またいわゆる「北海道写真」

は、北海道開拓の写真記録という記録性に特質がうかがえます。そして、「横浜写真」はお土産写真としての商業性が特色であるといつてよいと思ひます。

木村 「横浜写真」といつた場合一般的には、明治一〇年代から二〇年代にかけてひとつの地場産業として成立し、外国人にむけて観光土産として蒔絵の表紙をつけ、アルバムに仕立てて売られた写真ということになるかと思ひます

が、源流はベアトにあつて、ベアトの原板はスティルフリードからフアサリ商会(A.F. Harris Co.)へと受けつがれています。蓮杖の弟子たちは、横山松三郎にしろ中島待乳にしろ東京へ移つてしまうので、「横浜写真」をひきついだのはベアトの流れになるかと思ひます。

齋藤 フアサリは手彩色の面で、「横浜写真」を一段進めたということでしょうか。しかし、人工着色を誰が始めたのか、史実のうえではよくわからないところがあります。

木村 ヨーロッパでは、ダゲレオタイプの時代から色を着けることはしています。

小沢 写真は発生前から色彩を欲

してました。ですから、色を着けること自体は新しいことではありません。しかし、日本の場合、色で表現するということになるので、ベアトの時代からなりましよう。

齋藤 ある意味では、日本画の伝統と写真がむすびついたといえなくもない。

小沢 そういいたいくなるようなものがありますね。ベアトの風俗写真の場合、色彩でみせたいという意図が感じられます。その意味に限れば、ベアトが「横浜写真」の祖といえるのではないでしようか。

齋藤 「関東写真」といういい方もありますね。その場合、横浜と東京の土産写真の違いはどういうことになりましようか。

小沢 日本の紹介ということでは内容的に同じようなものですが、時代的には東京は横浜の次の時代、つまり絵葉書が登場してくるまでの間の年代ということになるでしようか。

木村 小川一真などが有名ですが、小川一真のコロタイプも内容的には「横浜写真」の系統といつてよいでしよう。

小沢 年代的な表現の洗練の度合い、写真印刷による量産という点を除けば、基本的には同じでしようね。

齋藤 ベアトの時代にあつては、フジヤマもゲイシャもハラキリも現実であつたわけですが、明治の終わりともなるとアナクロニズムになつて間違つたイメージを輸出したことになる。ベアトのものには自然さがありますが、次第にバックに書割が登場し、演出過剰になつてくる。しかし、時代をさかのほれば、日本を世界に紹介したということ、

「横浜写真」の功績は非常に高いものがあります。日本の視角の紹介を含めて。

小沢 やがて「横浜写真」の終焉ということになるわけですが、その初期においては、意義ある文化的価値を充分もつていますし、写真技術の発展に大きな役割を果たしたことは確かです。日本の写真史研究はまだこれからですし、まして個々の写真家については緒についたばかりの段階です。今回、横浜開港資料館が幕末の写真家ベアトをとりあげ、作品展とともにベアトの収蔵写真カタログをつくられるということ、大変喜ばしく、また期待をしています。

齋藤 本日は長時間ありがとうございました。

(二月六日の鼎談です)

◆◆◆
横浜開港資料館所蔵
「F・ベアト幕末日本写真集」
(定価二〇〇〇円)

18枚の肖像写真

『岩倉使節団の米欧回覧』展余話

展示がまだ企画家の段階のころ担当者の間では、どういう視点でテーマを扱っていくかについての話し合いが続く。研究蓄積・調査期間・具体的な展示品の有無などを考慮しながら、出された案を検討するのである。当然、おもしろい視点ではあっても「いつか、別の展示で……」とあって課題として持ち越されるものが多い。

今回は岩倉使節団派遣当時の留学生の動向が話題となったが、具体化は諦めていたところ、幸い大久保利謙先生のご好意で以下の資料が展示できることとなり、若干ではあるが触れることができた。

この使節団員と留学生の肖像写真は戦後、大久保先生が岩倉家から譲られたもので、岩倉具視に献上されたものということであったが、写真の記載から具視の第三子具定（一八七〇—七二年、ニュー・ブランズウィックに留学。変名、旭小太郎）に贈られた写真も混っていることがわかった。（中武）

No.	名前	出身	撮影地	写真の記載	備考
①	山口尚芳 (1842-1894)	肥前	パリ	山口尚芳 (裏面・墨書)	岩倉使節団副使
②	福地源一郎 (1841-1906)	幕臣	パリ	福地源一郎 (裏面・墨書)	岩倉使節団一等書記官
③	川路寛堂 (1845-1927)	幕臣	ロンドン	川路寛堂 (裏面・墨書)	岩倉使節団三等書記官
④	東久世通禧 (1833-1912)	公家	ワシントン D.C.	呈 岩倉具定盟書 東久世通禧 (裏面・墨書)	岩倉使節団理事官 (宮内省)
⑤	山田顕義 (1844-1892)	長州	パリ	奉呈 全權大使閣下 陸軍少将 山田顕義 (裏面・ペンと墨書)	岩倉使節団理事官 (陸軍省)
⑥	塩田三郎 (1843-1889)	幕臣	パリ	塩田三郎 (裏面・墨書)	岩倉使節団一等書記官
⑦	山川健次郎 (1854-1931)	会津	ニュー・ブランズウィック (アメリカ)	洋 千八百七十一年十一月七日 於 新武 学弟 山川健次郎 (裏面・ペン書)	1871 アメリカ留学(-1875)。のちに開成学校・東大教授、東大・京大総長、貴族院議員。
⑧	上野景範か (1845-1888)	薩摩	ロンドン	To Asahi Esqr. from His bosom friend Wooyeno London (裏面・ペン書)	1870 大蔵大丞。特例弁務使としてイギリスに派遣される(-1871)。1872 外務省に転じる。駐米弁理公使、外務少輔。1874 駐英特命全權公使(-1879)。
⑨	町田清次郎か (1851-?)	薩摩	ニュー・ヘブン	To Asahi Ersq. (ママ) Present my Picture From Machida (裏面・ペン書)	慶応元年の薩藩英国留学生の一人。1870 アメリカ留学(ニュー・ブランズウィック、ニュー・ヘブン)。
⑩	大久保三郎 (生没年不詳)	静岡	ニュー・ブランズウィック	呈 旭公、大久保三郎 (裏面・ペン書)	1871 アメリカ留学(1873年、在ニュー・ブランズウィック)。のちに東大植物園主事。
⑪	平山太郎か (? -1891)	日向	ボストン	T. Hirayama (表・ペン書)	1869 藩主の子に随ってアメリカ留学(-1874)。のちに東京図書館長、第五高等学校長。
⑫	寺田弘 (生没年不詳)	薩摩	ライプチヒ	譯上公閣下 千八百七十三年六月十一日 寺田弘 恐惶再拜(裏面・ペン書)	1871 伏見宮能久親王に随ってドイツ(ベルリン)留学。
⑬	万里小路通房 (1848-1932)	公家	ロンドン	呈 岩倉公閣下、万里小路通房 (裏面・ペン書)	1871 岩倉使節団に同行してイギリス留学(-1874)。
⑭	蛟島尚信 (1845-1880)	薩摩	パリ	奉呈 岩倉公閣下、蛟島尚信 (裏面・墨書)	慶応元年の薩藩英国留学生の一人。1870 駐英・仏・独・北連邦少弁務使(フランス在勤)。1873 特命全權公使
⑮	鶴田 皓 (1836-1888)	肥前	パリ	鶴田 (裏面・墨書)	1872 司法省視察団の一員として欧州出張(-1873)。
⑯	由利公正か (1829-1909)	越前	ロンドン	由利 (裏面・墨書)	1871 東京府知事。1872 岩倉使節団に随行して欧米視察(-1873)。
⑰	松村淳蔵 (市来勤十郎) (1842-1919)	薩摩	ロンドン	松村淳蔵 (裏面・墨書)	慶応元年の薩藩英国留学生の一人。1867 アメリカに渡る。1869 ラトガース大学を退学し、アナポリス海軍兵学校入学。1873 同兵学校を卒業。帰国。海軍中佐。1875 出張で再びイギリスへ。のちに海軍中将、海軍兵学校長。
⑱	同 上	同上	アメリカ海軍兵学校	まつむら淳蔵 (裏面・ペン書)	

(注)・撮影地の 、 は同じ写真館の意味。



③ 川路寛堂



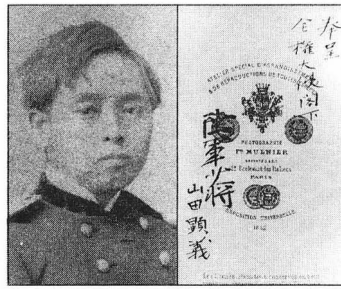
② 福地源一郎



① 山口尚芳



⑥ 塩田三郎



⑤ 山田顕義



④ 東久世通禧



⑨ 町田清次郎か



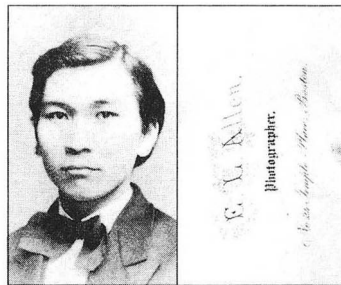
⑧ 上野景範か



⑦ 山川健次郎



⑫ 寺田 弘



⑪ 平山太郎か



大久保三郎



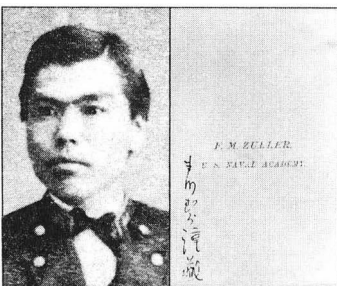
⑮ 鶴田 皓



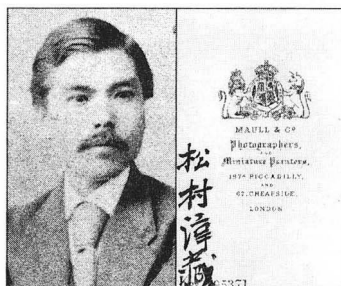
⑭ 鮫島尚信



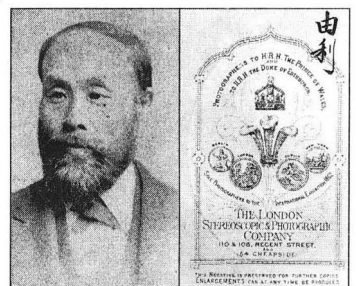
⑬ 万里小路通房



⑱ 松村淳蔵(アメリカで)



⑰ 松村淳蔵(イギリスで)



⑯ 由利公正か



写真が一八二点、地域毎にI「横浜とその周辺」II「金沢と鎌倉」III「東海道」IV「箱根と富士」V「江戸とその周辺」VI「琵琶湖と瀬戸内海」VII「長崎」に区分されている。

『F・ベアト幕末日本写真集』

の間に、日本がいかに大きく変わったか、考えさせられる点が多いであろう。

横浜開港資料館では、二月一日から開催される「写真家ベアトと幕末の日本」展にあわせ、『F・ベアト幕末日本写真集』を刊行する。「写真編」には当館で所蔵するベアトの写真二三六点のすべてが収録されている。そのうち風景

現在神奈川県に属するI〜IVは、横浜に近く、またその大半が外国人遊歩区域に含まれていたため、さすがに点数も多く、充実している。建設途上の横浜の全景やその近郊の農漁村、吉田新田・本牧等、今はなき根岸湾や金沢の平潟湾、厚

や人々の生活を彷彿とさせることができよう。それが明治維新以後急速に変貌する直前の姿だけに、風景にも風俗にも、いわば「野生味」のようなものがあり、現在と対比することによって、この百数十年

つてどのように理解され、世界に紹介されていたかを知りうる資料として、これも翻訳して掲載した。「横浜写真小史―F・ベアトと下岡蓮枝を中心に―」と題する「解説編」では、ベアトに先立っ

て来浜したソングラスとパーカー、横浜におけるベアトの足跡、その後継者であるステイルフリードとファサリ商会、日本人写真家のパイオニア下岡蓮枝とその弟子や周辺の人々等、横浜で活躍した写真家について、今日知りうるかぎりの事実が網羅されている。また読者の理解を助けるために、明治四年(一八七二)の「横浜地図」と慶応三年(一八六七)頃の「横浜周辺外国人遊歩区域図」を収録した。(B5判二〇〇ページ カラー一八ページ 定価二〇〇〇円) (斎藤)



行事開催予定 (昭和六一年度)

- ▼展示 (企画展示室)
- (1)企画展示『写真家ベアトと幕末の日本』2/1〜5/5
- ▼講座 (講堂)
- (1)横浜歴史講座 (後期) 開講中期の農村」井川克彦(館員)、2

- ▼28「市域農業生産の推移」大豆生田稔(城西大講師)、3/14「ベアトと下岡蓮枝」横浜写真事始」斎藤多喜夫(館員)、3/28「戸井嘉作と大正期の神奈川県」上山和雄(国学院大助教授) 13時30分〜15時30分

昭和六二年度 展示企画

- (1)「幕末の横浜居留地」5/8〜7/29
- (2)「横浜水道創設一〇〇年記念 H・S・パーマー」8/1〜10/29
- (3)「市政施行前後の横浜」11/1〜1/31
- (4)「浮世絵師の描いた横浜開港」2/3〜5/5

ミニ二情報

- ▼寄贈資料 (二〇月〜二月)
- (1)西川オルガン 明治四二年製第一〇号型(旭区若葉台 中箸充宏氏) 旧館一階記念ホールに常設展示
- (2)「Tokyo City, 1915」1点(東京都北区 ドナルド・キーン氏)
- (3)元東洋汽船船長菊地勇関係写真(旭区東希望ヶ丘 菊地俊夫氏)
- (4)旧三菱ドック清明館(第一船員食堂) 建築設計書図(三菱重工横浜製作所)
- ▼出版物
- (1)『F・ベアト幕末日本写真集』定価二〇〇〇円
- (2)「横浜市史料所在目録第11集補遺編一」
- ▼閲覧可能複製資料
- (1)「金沢区森兵五家文書」



昨年の十一月、万延元年(一八六〇年)の遣米使節団に関する調査のため、米国のワシントンにある国立自然史博物館を訪れました。この建物の奥深くに、使節団が当時の大統領ブキャナンに贈った品物や、ペリー提督が日本から持ち帰った品物が、百数十年経た今もなお、当時のままの鮮やかさで保存されているのを目の当りにして、大変感激いたしました。

博物館というものが、単に展示や資料の保管倉庫ではなく、生きや資料の研究機関として幅広く情報を収集し、現代の人々に、更には次代の人々に伝達していく機関であることを改めて痛感した次第です。まだまだ至らない処だらけの当資料館ですが、理想は高く掲げて、その実現に邁進したいと念じております。(西池)